

聖書：ヨハネの黙示録 12：1～6

説教題：荒野で教会を養う神

日時：2021年5月2日（朝拝）

黙示録はここから再び新しい区分に入ります。これまでアジアにある7つの教会への手紙を見た後、7つの封印の幻、7つのラッパの幻を見て来ました。同じような7つのシリーズがこの後15～16章に出て来ます。7つの鉢の幻です。その間にある12章～14章（厳密には15章4節までとも言えますが）に記されることは何でしょうか。多くの学者は、ここにヨハネの黙示録のカギとなる中心的な幻があると見ます。主の復活から主の再臨の日まで世界の歴史はどのように進んで行くのか、その中で教会はどんな戦いの中に置かれているのかが繰り返し語られていますが、その歴史の根底にあるものは何かがここに語られていると。目に見える出来事の背後にある霊的な戦いが示されていると。前後の7つの幻のように番号は振られていませんが、多くの学者はこれから見る幻にも7つの何かに相当するものを見つけようとします。ある人はここに7つの象徴的存在が登場すると言います。すなわち女、竜、第一の獣、第二の獣、144,000人、宣べ伝える御使い、人の子の来臨と。またある人はここに「私は見た」とか「見よ」という言葉が繰り返し出て来て、その言葉に注目すると7つに分けられると言います。一つ目が今日見る12章で、次は13章1節：「また私は・・・見た」。次は13章11節：「私は・・・見た」。その次は14章1節：「また私は見た」。その次は14章6節：「また私は・・・見た」。このような調子です。いずれにせよ、最後の場面である14章14節以降はキリストの再臨の日を描いています。このようにこれから見る12章、13章、14章はこれまで述べられて来た歴史のさらに根底にあるもの、根本的な戦いについて描いて行きます。それは私たちが天の視点をいただいて良き戦いをなすためです。

さっそく今日の箇所を見て行きますが、まず1節に「一人の女」が出て来ます。これは誰でしょうか。この後の5節を見ると、この「女は男の子を産んだ」と記され、その子はイエス・キリストを指しているようです。とするとそのお母さんですから、これはイエス様の母マリヤなののでしょうか。ローマ・カトリック教会はそうのように読みます。そうすると1節でマリヤは特別な栄光に満ちた偉大な女性として描かれていることになりそうです。しかしそうではないことが、この後を見ると分かります。特に17節を見ると、この女は、神の戒めを守り、イエスの証しを堅く保

っている者たちの母として語られています。ですからこの女は神の民としての教会を指していると考えるのが適切と思われる。その教会が1節で「太陽をまとい」と言われています。これは教会の栄光を表現しているものと言えます。まことの光の源なる神の光を受け、これを映し出す祝福に生かされています。「月を足の下にし」は教会に与えられている権威を、「頭に12の星の冠をかぶって」は教会が真の王なるイエス様の勝利と王権にあずかっていることを示します。12の星は明らかにイスラエルの12部族また新約の12使徒を暗示します。教会はこの世からは色々な目で見られているかもしれません。蔑まれ、低く見積もられているかもしれません。しかし神の前ではどんなに栄光ある存在であるか、どんな輝きと祝福を頂いている者たちであるかがこうして描かれています。

2節に、その「女は身ごもっていて、子を産む痛みと苦しみのために、叫び声をあげていた」とあります。これはどういう意味でしょうか。この背景にあるみことばは創世記3章15節のいわゆる原始福音です。子を産む痛みと苦しみは罪の結果、この世に入って来たことが創世記3章に記されています。しかし子どもの出産には希望と慰めがあることが創世記3章15節で語られていました。「わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」ここには罪に落ちた人間を救い出すために、神はやがて女から、すなわち人間から救い主を誕生させるという約束が語られました。旧約の歴史は、この救い主の誕生を待ち望む産みの苦しみの期間と言えます。このメシヤが来なければ救いはありません。その方の誕生こそ唯一の希望です。そのメシヤの誕生に向かって痛み、苦しみ、叫び声をあげていた期間と言えます。ですからこれはマリヤ一人のことではなく、救い主を待望する神の民の苦しみであり、うめきです。望みを持ちつつ、叫び声をあげていた。

3節に、また別のしるしが天に現れたと記されます。今度は炎のように赤い大きな竜が見えました。これは何でしょうか。これは次回見る9節にはっきり書いてあります。この大きな竜とは「すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者」であると。確かにサタンは創世記3章で蛇として登場して来ました。こうしてこの黙示録12章からの部分では、悪魔があらゆる悪の根源にあることがはっきり示されて行きます。これまでも暗示的な表現でサタンの存在には言及されて来ました。6章8節、9章11節、11章7節などです。その本体あるいは正体

がはっきり描かれようとしています。この竜は「炎のように赤い」とあります。これはこれまでも見て来たように流血のイメージでしょう。殺し、破壊するサタンの活動を指し示すものです。またサタンがいかに力強いかが3節後半に描かれています。まず「7つの頭を持ち」とあります。もちろんこれも象徴ですが、思い浮かべると化け物のような姿です。7つの頭があったら、仮にその一つを打っても、他の頭によってこちらがやられてしまいます。この頭は知性、賢さを象徴し、サタンの特別な知恵を示しています。また頭が7つあるとはサタンの知恵が世界の色々なところで働いて様々な影響を及ぼしていることを暗示しているのかもしれませんが。次に「10本の角」とありますが、角はこれまでも見て来たように「力」の象徴です。また頭に7つの王冠とあります。王冠はイエス様こそかぶるにふさわしいものですが、サタンはこうして自分のものとして主張しているということでしょうか。しかも7という完全数をもって。

その彼がしたこととして4節に「その尾は天の星の三分の一を引き寄せて、それらを地に投げ落とした」とあります。ある人はこれは天の秩序をこのように乱して神の摂理に反逆している姿を指すと取ります。またある人は星は天的存在の象徴として黙示録で語られていますから、その中のある者たちを自分に従わせ、地に悪影響を及ぼしている姿を指すと取ります。いずれにせよ神と神の民に対する攻撃的な行動ということでしょう。そして4節後半にこうあります。「また竜は、子を産もうとしている女の前に立ち、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。」これも創世記3章15節と深い関係があります。神は蛇と女との間に敵意を置き、やがて女から出る一人の子孫を通して、すなわちメシヤを通してサタンを打ち砕くと語っていました。ですからサタンにとっては、やがて女が生むその一人の相手こそ自分の真の敵です。その女から出る子が生まれたら、直ちに食べて滅ぼしてしまおうとしていた。実際イエス様は誕生後、間もなくいのちを狙われたことが福音書に記されています。ヘロデ王はイエス様を殺そうとしてベツレヘム近辺の2歳以下の男の子を皆殺しにしました。その間、マリヤとヨセフとイエス様はエジプトへ逃れていました。ですからあのヘロデによる虐殺は単にヘロデがしたことと言うより、その背後にサタンがいたということですから。そしてこれは誕生の瞬間だけでなく、イエス様の地上の生涯全般にわたる悪魔の攻撃を指します。悪魔は何度もイエス様に襲い掛かり、その救いの働きを無に帰そうと手を尽くしました。

果たしてその結果はどうだったでしょう。5 節に「女は男の子を産んだ」とあります。「この子は、鉄の杖をもってすべての国々の民を牧することになっていた」という部分は、メシヤ詩篇の詩篇 2 篇 9 節で預言されていた言葉そのものです。また同じ言葉はすでに黙示録 2 章 27 節にも出て来ていて、神の民もこのイエス様の王権にあずかることが言われていました。そのイエス様について 5 節後半に「その子は神のみもとに、その御座に引き上げられた」とあります。これはイエス様の復活そして昇天を指すものです。イエス様の誕生後の色々な出来事は省略されています。最初と最後だけが記されています。悪魔はイエス様を十字架につける出来事において勝ったように一見思われましたが、イエス様は罪を犯さずに最後まで聖いご自身を身代わりにささげたその死において、むしろ悪魔と罪に打ち勝ったと聖書は語ります。そのはっきりした証拠としてイエス様は死より復活し、天の御座へと上げられました。ここにイエス様の決定的勝利が示されました。キリストこそが世界と宇宙の王座へと上げられました。そこでサタンは地上に残されている教会を迫害することへ向かったというのが 6 節です。次回、よりはっきり見る通り、決定的な勝負はここでついたのでした。サタンの敗北は決まりました。しかしサタンはできる限りの反抗を企てます。神の計画をいくらかでも壊してダメージを与えるため、死に物狂いで活動していると聖書は語ります。

さて女として表現されている神の民、教会は「荒野へ逃れた」とあります。1260 日の間、そうであると。これは前に見ましたようにいわゆる教会時代、イエス様の昇天後ヨハネの時代から世の終わりまでのすべての期間を指す言葉と考えられます。ですから今日の教会にもこれは当てはまります。ここから今日のまとめとして 3 つのことを心に留めたいと思います。

まず一つ目は、このみことばによれば今日の私たち教会は荒野にいとわられていることです。私たちは自分をそのように捉えているのでしょうか。むしろ荒野とは無関係の豊かな土地、近代化された素敵な都に住んでいるかのように考えていることはないでしょうか。しかし黙示録は何と私たちは今、荒野にいとわります。あのエジプトを出て約束の地に向かうイスラエルの民のイメージです。確かにこの世は私たちがいつまでも住みつく場所ではありません。私たちの真のふるさととは天にあります。その天に向かって私たちは今、旅の途中にある者たちです。あのイスラエルが約束の地に向かって荒野の中を進んでいた時のような者たちです。私たちは

自分をこの光の下で捉え直すことによって、今の世に満足し、今の世に落ち着いてしまっはならないこと、むしろ目指すべき地がもっと先にあることを思い起こさせられたいと思います。

2 つ目は私たちは荒野にあると言われていますが、だからと言って神に見捨てられているのではないということです。何とこの荒野で神が養うということが言われています。これは普通に考えれば信じられないようなことです。イスラエルの民が荒野に出ていくことは自ら死に向かうようなことです。どうやってこれだけの人々が荒野で生き延びることができるのか。神が養ってくださるならもっと他の場所でそうして下さったら良いのではないかと人間は思う。しかし神は確かにあの荒野で神の民イスラエルを養われました。神は毎日天からマナを降らせられました。また水がないところでは岩から水を湧き出させて彼らを養われました。あるいはエリヤの体験も思い起こさせられます。I 列王記 17 章でイスラエルへのさばきとして干ばつが生じた時、神はエリヤをケリテ川のほとりで養われました。何とそこではカラスが朝と夕にパンと肉を運んで来ました。今日開いている 6 節に「人々が彼女を養うように」と書いてあって、この「人々」とは誰かと私たちは気になるかもしれませんが、それは重要ではありません。神がエリヤを養うためにカラスを用いたように、そのように誰かを用いて、あるいは何かを用いて教会を養うということです。そして荒野を旅する間、神の守りは十分であったことが申命記 2 章 7 節でこう言われています。「事実、あなたの神、主はあなたのしたすべてのことを祝福し、この広大な荒野でのあなたの旅を見守っていたのだ。この四十年の間、あなたの神、主はあなたとともにいて、あなたには何一つ欠けたものがなかった。」

三つ目のことは、神はこのように荒野で守ってくださるという約束は私たちがここで無頓着に生きてても良いということは意味しないということです。荒野は神の民を試す場、訓練する場でもありました。申命記 8 章 2～3 節で主は荒野での行程についてこう言われました。「あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを歩ませられたすべての道を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試し、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。それで主はあなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの父祖たちも知らなかったマナを食べさせてくださった。それは、人はパンだけで生きるのではなく、人は主の御口から出るすべてのことばで生きるということを、

あなたに分からせるためであった。」 荒野の生活は確かに厳しいものであり、そこは彼らをテストする場でした。彼らの不信仰はそこで明らかにされ、その罪は裁かれました。しかしそれも彼らを真の祝福へ導くための神の方法でした。申命記 8 章 14～16 節：「主はあなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出し、燃える蛇やサソリのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない乾ききった地を通らせ、硬い岩からあなたのために水を流れ出させ、あなたの父祖たちが知らなかったマナを、荒野であなたに食べさせてくださった。それは、あなたを苦しめ、あなたを試し、ついにはあなたを幸せにするためだったのである。」 ホセア書 2 章 14～15 節：「それゆえ、見よ、わたしは彼女を誘い、荒野に連れて行って優しく彼女に語ろう。わたしはそこを彼女のためにぶどう畑にし、アコルの谷を望みの門とする。その場所で彼女は答える。若いころのように、エジプトの地から上って来たときのように。」 ご自身の民を荒野へと導かれる神の思いには、このような愛のご計画、愛の意図があるということです。

以上から私たちは改めて聖書のイメージを通して自分たちを捉え直したいと思えます。私たちは主の再臨の日まで荒野の中にいるような者たちです。しかしグッドニュースは、その荒野のただ中で神は私たちを守り、養ってくださるということ。人間の目で見れば、どこにも助けがないように見える中で神の十分な守りがある。これは一体何だろうか？と彼らが思うような不思議なマナを天から毎日降らせて荒野の民を養われた神が今日も教会とともにおられる。また砂漠のような地で、もはや望みはないと思われる状況でも、神は目の前の堅い岩からいのちの水を湧き出させ、私たちを潤してくださる。そうして信仰の道を最後まで歩み通すために必要な助けと守りを日々与えてくださる。私たちはどんな試練や戦いの中に置かれても、そこにも神の恵みは十分であること、いやそこでこそ神はご自身の恵みを豊かに示してくださることを信じ、神により頼み、神によって守られる歩みへ進みたいと思えます。またそれらの試みを通して聖められる者とされたいと思えます。そしてかの日にゴールに達した時には、私の地上のすべての歩みはただあなたの恵みによって導かれたことと告白し、すべての栄光を神に帰して、私たちに用意された真の故郷、天の御国に入る者とされる幸いと光栄に歩みたいと思えます。